

牽牛の 婦迎へ船 漕ぎ出らし

天の川原に 霧の立てるは

作者未詳 巻八・一五二七

を迎えに行くために
天の川を船で渡るとあ
ります。

7月7日は七夕で
す。こどもの頃は、夜
間に外に出ても怒ら
れない数少ない機会
というだけで、心が弾
んだものでした。近所
の山から折り取って
きた笹の枝に短冊を飾
り、涼やかな風を吹か
れながら夜空を見上
げていたことを思い出
します。七夕が近づくと、小学校の外廊下

にも大きな笹竹が登場
し、金色や銀色の折り
紙で作った飾りがきら
きらと揺れて、普段と
は違うワクワク感があ
りました。

この歌は、「万葉集」
に百首以上も残る七夕
歌のうちの一首です。
天の川を見て、牽牛が
あの川を越えて織女に
会うために船を漕ぎ出
したらしい、と詠んで

やまと 万葉がたり

います。夜空に光る星
々を川霧に見立てたと
みられます。その川霧
は、船を漕ぐ際の水し
ぶきから立ち上ったも
のと考えたかも知れま
せん。

七夕は、奈良時代に
中国から入ってきた星
の伝説に基づいてい
ます。仙女と人間の男
性が恋に落ち、年に一
度だけ会うことを許
されるというお話で
す。彼の国では人間
牛が織女へ会いに行
くと表現されました。
女である織女が会い
に行くことになってい
ます。漢詩では、織女
が鵲の橋をかけて渡
るなども表現されて
います。

【訳】牽牛が妻を迎える船を漕ぎ出したらしい。
天の川原に霧が立っているのは。

多くの歌では、牽
牛が織女へ会いに行
くと表現されました。
当時の日本列島には、
男性が女性の家を訪
ねて会うという、通
婚の風習があった
からだと考えられて
います。この歌では
さらに、牽牛が織女
(県立万葉文化館指導
研究員・井上さやか)
に原則、隔週掲載

皇は 神にし坐せば 真木の立つ

荒山中に 海を成すかも

柿本人麻呂 卷三・二四一

7月第3月曜日は「海の日」です。海の恩恵に感謝する日として制定されました。ただ、日本列島には海に面していない県も存在します。そんな海無し県のひとつである奈良県では、同じ日を「奈良山の日・川の日」と定めています。古代から山に囲まれ、川と暮らしてきた歴史と文

化を伝えていくという取り組みのようです。そもそも、豊かな自然を抱く山と、そこから流れくだる滋養に富んだ川の水とがあってはじめて、美しい海が育つといえます。西側に山が連なり、東側には太平洋が広がり、間を幾筋もの清流がつなぐ宮崎平野

やまと
万葉がたり

で育った私にとって、それは実感としてあります。この歌は、そんな海を山の中に作るがあります。現実にはあり得ないことであり、それを成し遂げられるのは普通の人間ではなく「神」であるといえます。「大君は神にし坐せば」とは、下句に現実にはあり得ないこと

を成し遂げる表現を統けることで、大君の偉大さを称える常套表現です。作者の柿本人麻呂は、「万葉集」に数多くの秀歌を残し、後世に歌聖とまであがめられた有名な歌人です。持統天皇や文武天皇の時代、7世紀末から8世紀初めにかけて活動したとみられ、「大君は神にし坐せば」や「やすみしわが大君」などの天皇を称える表現は、当時の歌の特徴ともなっています。

【訳】大君は神でいらっしやるので、真木茂る荒々しい山中にまで海をお作りになることよ。

を成し遂げる表現を統けることで、大君の偉大さを称える常套表現です。

江の海」(巻三・二六六)と表現していることから、古代には今でいう湖を「海」と呼んだようです。湖(みずうみ)とは「水(みず)海(うみ)」の意味だとみられます。この歌に詠まれた「海」がたとえ湖のことであったとしても、山の中に湖を作ること

は、やはり神の業であったことと思えます。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 原則、隔週掲載